



## 銭湯について 杉山六郎さんの講演

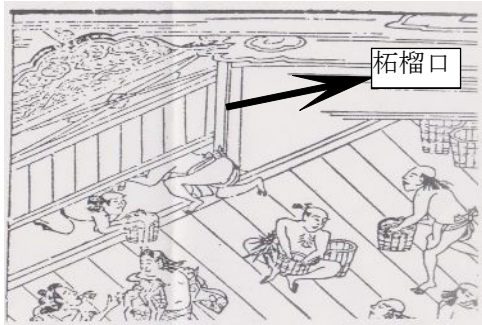


2月20日「すまいる亭」の杉山六郎さんの講演より

この関東に銭湯という仕組みが持ち込まれたのは徳川家康が関が原の戦いで勝利する以前です。江戸の土地整備のために地方から呼んだ労働者達のために伊勢からオーナーがきて銭湯を開きました。

蒸し風呂で狭い中、お湯を沸かして蒸気で身体を温めるのが最初のやり方でした。今の値段で100円位でした。一般の家庭でなぜ風呂が発達しなかったのか、それは薪が高かったからと上水が豊富になかったからです。上水は井戸水が主で、行水か身体を拭くことでお風呂の役割してました。

その後、需要が増え値段を少し上げ、江戸には銭湯が最盛期は600軒位ありました。初期のころは混浴で、脱衣所も一緒に男は禪姿、女は湯もじ（浴衣）を身に着けて入浴しました。熱が逃げてしまう為、窓はなくほのかな行灯の光で明りをとり湯気が逃げないように柵榴口ざくろくちという狭い入口から入りました。真つ暗の中、入る時には前を隠して「冷え者でございます」「枝が出ます」みんなに冷たい身体が触らないよう手足がぶつからないようにそういう文言



を言うしきたりがあり、お互いに気を使ったり入りました。付けたままでは風呂水が汚れるので、その後は禪も湯もじも身につけずに男女とも裸で入りました。

1700年代、幕府は風紀が乱れるので混浴を廃止し、男女別にしましたが、浴槽が一つで板で仕切られ、潜水すれば隣の風呂に潜り込める状態でした。

当時、江戸は8対2で男性人口が多く、（地方から来た労働者や大名行列で下級武士がたくさんが来た為）、そのうちに銭湯は、

男性の身体や髪をとかしたりする湯女ゆなを置くようになりました。風紀が乱れると幕府は禁止令を出しましたが、湯女の方が吉原の遊女や私設の岡場所より料金が安いので繁盛しました。倍の湯銭を払うと2Fにあがれ、囲碁や将棋ができ女湯も覗ける男性天国でした。

お風呂の道具として垢すりは手拭い、へちまを使いました。へちまを栽培して酒樽に浸して腐らせて自分でへちまの垢すりを作っていました。また、子供から大人まで手足にあかぎれができ、お風呂で割れたところを軽石でこすってました。他に肌を

美しくするために糠袋ぬか（糠は米油が入っている）・うぐいすのふん・大豆をたたいて大豆の油

で磨きました。男性は毛切り石（石でたいて性毛を切る）も持つて入りました。

江戸時代は髪を洗うのが大変なのと洗った

後が大変な為に、月に1回か、半月に1度しか洗いませんでした。ごま油・椿油・くるみをつぶした油やびんつけ（松やに油を混ぜる）で髪を結ってました。

歯磨きはあわ砂と塩を混ぜた物を歯磨き粉売りから買い使用し、はぶらしの主流は柳の先端をつぶしたものでした。砂糖は手に入りやすく、甘いのは干し柿程度でしたので歯はきれいでした。

銭湯でお湯の量は少ないので、お湯を使いすぎると三助に怒られました。留め桶（大きな桶）・小桶を借りるお金を月300円払って自由にお湯を使う権利を得られました。留め桶を持つて入る人は、拍子木でしゃんしゃんとして迎えられるので優越感を得られました。

番台で拍子木1回で男、女は拍子木2回で三助に背中を流すお客さんを知らせてました。現在は日暮里駅前の斉藤湯だけが三助がおります。男性は三助と番台に座るのがやつてみたかったでしょうが、番台に座れるのは長年勤めた番頭や主人か奥さんでした。

また、元旦・桃の節句（桃の葉を入れると疥癬がでない）、五月の節句（菖蒲湯で邪気を祓う）冬至（ゆず湯）に粋な人は番台にチップを払ってました。

現在、南千住では1丁目は大勝湯、弁天湯5丁目新柳湯、6丁目又六湯、7丁目草津湯のみになりました。

下湯をしてから上がり湯に入る生活のマナーを教えてもらう場所が銭湯です。月に一度はぜひ、子供達を連れていってみてください。